

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
農産・蚕糸部門

水稲・大豆を主とした多収、高品質生産による高収益、家族複合経営の実践

○氏名又は名称 有限会社アグリゴールド矢木（代表 矢木 龍一）

○所在地 富山県下新川郡入善町

○出品財 経営（水稲）

○受賞理由

・地域の概要

入善町は、北アルプス立山連峰を源流とする黒部川に作られた扇状地で、広大な平地と豊富な水資源に恵まれた地域である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

水稲と大豆を主体に白ねぎ等の園芸作物を含めた複合経営であり、経営面積約160ha（平成30年）の規模で、従業員10名のメガファームである。

省力化、低コスト化を徹底し、高い収量と高品質な生産を両立することで高収益経営を実践している。

・受賞者の特色

（1）高い技術力による高収益経営の実践

水稲、大豆の栽培において、水管理、土作り、病虫害防除や追肥などの栽培管理、収穫後の乾燥や調整などを含めた基本的な栽培管理、調整技術を徹底かつ確実に行うことで、大規模な経営であるにも関わらず、水稲の1等比率はほぼ100%、大豆の品質も地域平均を上回る品質を確保しており、収量も、県平均収量を60kg（水稲）も上回る収量を確保している。

（2）省力化、低コスト化の取組

省力化の取組として、栽培では、地域の水稲育苗組織の活用、栽培の一部に水稲直播技術を導入することで、播種・育苗の労力を削減した。病虫害防除では、周囲の認定農業者とともに立ち上げた防除組織で、無人ヘリによる防除を委託するなど、省力化を実施している。また、低コスト化については、地域の施設や機器の共同利用、きめ細やかな機械メンテナンスによる長寿命化、綿密な作業計画による効率的な機械運用により少ない台数での経営は、不要な投資を抑え、低コスト化を実現している。

（3）女性の活躍

代表を除く9名の従業員のうち、女性は4名と割合が高いこと、そのうち1名は役員であり、経営に参画しやすい環境となっている。また、全従業員が働きやすいよう必要な設備を含めた環境整備、従業員の意向にあった作業への従事、資格取得の支援など、働きやすく、従業員の意欲を保つための取組を実施している。

・普及性と今後の発展方向

地域の中でも率先して、新技術、品目、経営管理について導入しており、それらのノウハウは自分のみならず周囲の経営者へ伝えるとともに、地域との共生や互助を念頭においた地域発展の取組を進めている。今後、増加する受託農地については、周囲5法人と協力しつつ、経営面積を200haまで拡大することとしている。

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
園芸部門

部会一丸となって規模拡大、高品質・長期安定出荷を実現

○氏名又は名称 島原雲仙農協雲仙ブロッコリー部会（代表 本多 幸成）

○所在地 長崎県雲仙市

○出品財 経営（ブロッコリー）

○受賞理由

・地域の概要

雲仙市は島原半島の北西部に位置し、当部会の主な活動地域である雲仙市北西部では、平均気温17.6℃、日照時間約2,900時間、平均降水量1,897mmと気象条件に恵まれており、露地野菜を中心に、施設野菜や畜産が盛んな地域である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

当部会の活動地域では、過去にばれいしょが広く栽培されていたが、価格低迷や高齢化による労力負担により、昭和50年代頃からブロッコリー等の軽量作物の導入が進められた。平成9年の基盤整備事業の開始とともに、機械化体系の確立、全量共同選別出荷体制の整備等の取り組みを進め、30年には、作付面積166.8ha（H19：83.7ha）、部会員52名（H19：38名）となっている。

・受賞者の特色

（1）高い組織力と若手農業者の活躍

9割以上が専業農家である当部会は、30名がほぼブロッコリー専作経営で、部会活動（技術講習の実施、生育状況、販売実績の確認等）は高い参加率となっている。特に下部組織の若手後継者会（24名、平均年齢34.5歳）は、病虫害対策、品種・作型検討の栽培試験等を自主的に行うことで、若手農業者の定着・育成や部会の規模拡大、安定生産などの部会発展に大きく貢献している。

（2）規模拡大、高品質・長期安定出荷の取組

① 部会員が中心となり合意形成を進め、9年から2地区（計154ha）の基盤整備を順次進めるとともに、セル苗育苗、半自動移植機等の導入による機械化体系の確立、全量共同選別出荷体制の整備等により、1戸当たりの平均作付面積は、整備前の約1.2haから整備後には約3.2haまで急速に拡大した。

② 品種や栽培技術の検討等により作型分散、周年栽培体系を確立し、長期安定出荷（10月～6月）を実現した。また、集荷場までの断熱シートの利用、真空予冷の実施、氷詰め発泡容器での出荷など、収穫から出荷まで徹底した品質管理を実施し、市場からの評価も高い。

・普及性と今後の発展方向

当部会は、モデル産地として県内外の視察を多く受け入れており、特に県内他産地のブロッコリー作付面積、出荷量の拡大に大きく寄与している。

今後は、近隣地区でも栽培が拡大し、更なる部会員の増加が期待されるとともに、若手の育成、ドローン等を活用した防除等の省力化を進め、産地の拡大・強化を図っていく。

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
畜産部門

国産飼料に立脚したゆとりの有機牛乳生産

○氏名又は名称 有限会社石川ファーム（代表 石川 賢一）

○所在地 北海道網走郡津別町

○出品財 技術・ほ場（飼料作物（単年生））

○受賞理由

・地域の概要

津別町は、北海道東部の内陸部に位置し、総面積の86%を森林が占める典型的な中山間地域である。農業については、畑作と畜産が重要な作物となっている。環境に配慮した農畜産物「津別ブランド」の確立を進めている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

石川ファームは平成12年に町内酪農家19戸とともに「津別町有機酪農研究会」（以下「研究会」という。）を設立した。研究会では輸入飼料や化学肥料・薬剤に頼らず、有機自給飼料による牛乳生産を目指し、試行錯誤を重ねた。多くの酪農家が断念する中、石川ファームは地域の多くの関係者の協力のもと、有機飼料栽培技術を確立し、17年に完全有機に転換した。翌年、会員数5戸となった研究会が日本初の有機牛乳のJAS認証を取得し、製品の販売が開始され、現在に至るまで通常より高いプレミアム価格で販売されている。現在、代表取締役の石川氏は研究会会長としてリーダーシップを発揮している。

・受賞者の特色

（1）有機自給飼料作物栽培に基づく有機牛乳生産

- ① 時間と手間のかかる有機飼料を自ら栽培するとともに、有機畑作農家が輪作で栽培した飼料用とうもろこし（イアコーン）を利用するなど、高品質な国産有機飼料を確保して、北海道の平均58%に比べ78%と高い飼料自給率を達成している。
- ② 栽培、飼養管理において、GPSと自動操舵を組み合わせた真空播種機や搾乳ユニット自動搬送装置「キャリロボ」を活用するなど積極的に新技術を取り入れるとともに、TMRセンター設立・利用や放牧により労働時間を削減している。なお、経産牛43頭規模で、主労働力である石川夫妻の1日1人当たりの労働時間はおよそ5時間と極めて短い。夫人は酪農教育ファームやグリーンツーリズムの担当として活躍中である。

（2）関係者の輪の中で持続的な生産

有機牛乳の生産・販売には、研究会だけでなく農協、TMRセンター、畑作農家、乳業メーカーなど多くの関係者が関わっているが、持続的な生産活動を行えるよう、例えばTMRセンターの運営費を考慮して有機飼料の購入価格を決定するなど、コストを分担する関係を構築している。

・普及性と今後の発展方向

石川ファームでは高栄養の自給飼料生産拡大により飼料自給率100%を目指している。有機農業はSDGsアクションプラン2019の優先課題に位置付けられており、環境と地域経済を共存させた持続的な生産活動の成功事例として普及性が期待できる。

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
林産部門

厳しい気候条件下で地元の森を育てる夢に挑戦を続ける苗木生産者

○氏名又は名称 谷口 洋一郎・谷口 希子

○所在地 北海道川上郡標茶町

○出品財 技術・ほ場（苗ほ）

○受賞理由

・地域の概要

標茶町は、北海道東部に位置し、南部は釧路湿原を有している。太平洋気候であるため積雪量は比較的少ないが、夏と冬の寒暖差が大きく、夏は日照時間が短く、冬は土壤凍結が発生するという厳しい気象条件である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

谷口氏は、昭和 60 年に有限会社谷口山林種苗農園の代表取締役役に就任した。北海道の造林樹種であるカラマツ、トドマツを中心に年間 70 万本の生産規模で、釧路管内の約 7 割の苗木を占めている。近年では、コンテナ苗生産やクリーンラーチの採種園の造成を始めるなど新たな挑戦を続けている。

・受賞者の特色

(1) 地域の環境に適した苗木生産

苗畑を標茶町と弟子屈町に有し、気候が違う各々の苗畑で樹種、季節に合わせて苗を移動させて床替えすることで、気象害を防止するなど地域に適した育苗を実践している。また、床替え 1 回から 2 回に増やして発根を促すことにより、活着率が良く安定した品質の苗木を生産しており、購入者からの評判も良好である。

(2) クリーンラーチ採種園への取組

新たな造林樹種として期待されるクリーンラーチの苗木の生産を早期に行い、平成 30 年から地域に適した品種育成のため、クリーンラーチの採種園を造成した。また、民間で成長に優れた種苗の母樹の増殖に取り組む特定増殖事業者として認定を受けている。道内の採種園の中でも、採種木の活着率が特に高く良好な状況であり、数年後には、種がなり始めるものと期待されている。

(3) 女性の活躍

就労者の約 6 割が女性であり、女性専用トイレの設置や大型機械の運転資格取得を支援するなど女性が働きやすい環境を実現している。近年は、人手不足であるが、希子夫人の人脈を活かし、地元の短期就労者を長年に渡り受け入れており、人材確保に励んでいる。

・普及性と今後の発展方向

「地元の種を地元で植えて、地元の森を育てる」という夢のもと、手間をかけた良質な苗木は地域の需要を支えている。次世代への継承についても娘 3 人が就労するなど、生産体制は安定している。また、多くの森林で主伐・再造林の時期を迎えた今日、クリーンラーチ採種園への挑戦など更なる発展が期待できる。

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
水産部門

持続可能で高品質なマガキの養殖生産

○氏名又は名称 宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会  
(代表 後藤 清広)

○所在地 宮城県本吉郡南三陸町

○出品財 技術・ほ場(資源管理・資源増殖)

○受賞理由

・地域の概要

宮城県南三陸町は、眼前に太平洋に口を開く形の志津川湾が広がっている。湾内には、多種多様な魚族や海藻が生息していることから、漁業にとって大変優れた地域で、カキやワカメ、ギンザケなどの養殖業も盛んに行われている。また、採介藻漁業などと併せて豊かな海が漁業者の暮らしを支えている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

戸倉出張所カキ部会は昭和30年に発足し、東日本大震災前は、78経営体が参加していたが、平成29年現在は、34経営体に減少している。同カキ部会では、生産技術の向上や品質の改善、販売促進などの方策を活発に話し合われている。

・受賞者の特色

(1) 過密養殖からの脱却の取組と経営改善の効果

東日本大震災を契機に過密養殖の状態であったカキの養殖体制から脱却するため、同部会で年間100回にも及ぶ話し合いを重ね、養殖施設(筏)の間隔を広くすることとした。養殖施設の筏の間隔を広くし、台数を削減した結果、養殖期間の劇的な短縮と品質の向上に繋がり、1経営体当たりの年間の生産量及び生産金額が向上した。

また、養殖施設の台数削減によって、経費の低減及び労働時間の短縮が図られ、養殖カキのより丁寧な管理が可能となった。これらの取組みにより、都市部に移住していた子弟がUターンしてくるなど、後継者の確保にも繋がった。

(2) 持続可能な養殖業の追及に向けた取組

同部会では、養殖の国際的エコラベルであるASC認証の取得に向けてチャレンジし、環境負荷の低下や持続可能な養殖業の姿を明確に示すことにより、平成28年に日本で初めて認証された。

・普及性と今後の発展方向

養殖施設の見直しというリスク要因を乗り越え、経営改善と後継者確保に繋げた成果は、これからの持続可能な養殖業の姿を指し示す羅針盤になり得るものである。同様の困難な状況にある地域に多くの示唆をもたらすモデルとなる取り組みである。

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
多角化経営部門

経営理念「笑顔創造」がつくりだす「ユニバーサル農業」

○氏名又は名称 京丸園株式会社（代表 鈴木 厚志）

○所在地 静岡県浜松市

○出品財 経営（芽ねぎ、ミニちんげん菜、ミニみつば）

○受賞理由

・地域の概要

京丸園株式会社が位置する浜松市南区には天竜川が流れており、土壌は天竜川の沖積層で肥沃な砂土壌である。また、天竜川の西岸のすぐ脇を安部川が流れており、地下水の水位も高く、水質も良い豊富な水源に恵まれている。そして、浜松市の年間平均気温は16℃前後、降水量は約1,800～2,000mmと温暖な気候に恵まれており、日照時間は全国トップクラスの2,200時間ほどである。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

平成16年に家族経営から法人経営に移行し、多様な人たちが活躍できる「ユニバーサル農業」を推進しており、100名の従業員のうち約25%が障がい者で、年齢層も18歳から82歳までと幅広い。また、全国初となる量産芽ねぎの水耕栽培やミニちんげん菜の周年量産、みつばの小型化など、付加価値の高い独自の商品開発を行い、収益性を確保するとともに、オリジナルブランドを確立している。

・受賞者の特色

(1) 多様な人の力を結集したユニバーサル農業

多様な人が活躍できる『場』を創り出す「ユニバーサル農業」では、高齢者や障がい者も職員として働くことができるように作業環境を整備する必要があり、ミニちんげん菜の定植やトレーの洗浄、収穫・洗浄・検品・パッキングの作業機械などを自社開発して省力化・効率化を図るとともに、働きに応じた労働報酬を実現している。

(2) ユニバーサル農業の取組拡大

障がい者をパートナーとする「ユニバーサル農業」の普及を図るため、NPO法人しずおかユニバーサル園芸ネットワークや浜松市ユニバーサル農業研究会を立ち上げ、農業と福祉と企業の連携モデルを構築している。

・普及性と今後の発展方向

GAPの実践により、農作業が安全であり、行程を管理できるようになる。そして、農業が多様な人たちの活躍する『場』となり、農業の活性化と経営強化となる仕組みを確立させるため、京丸園は今後、健常者60名、障がい者40名、男女比5：5、10歳代から90歳代が活躍できる経営体を目指している。

令和元年度天皇杯受賞者受賞理由概要  
むらづくり部門

進取の精神で取り組むむらづくり

○集団等の名称 伊江村字西江上区（代表 知念 邦夫）

○所在地 沖縄県国頭郡伊江村

○受賞理由

・地域の沿革と概要

伊江村は、沖縄本島の本部半島から北西9kmの洋上に位置する周囲22.4kmの島で、1島1村の農村である。産業は第1次産業が主体であり、さとうきびや花き、葉たばこ、野菜、畜産といった農業が営まれている。気候は亜熱帯性であり年間を通じて植物等の育成には好条件であるが、雨水の多くは地下に浸透し海へ流れ出てしまい、水不足に悩まされてきた歴史がある。

・むらづくり組織の概要

西江上区の運営は行政を行う区行政委員会を中心に、老人会、婦人会、青年会、子供会、OB会が参画している。また、西江上区が運営・管理する西部かん水組合や集落内の排水路・道路の清掃を行う伊江地域資源保全の会と連携しむらづくりに取り組んでいる。

・むらづくりの取組概要

(1) 農業生産面

- ① 昭和50年代前半まで、主要な産業が農業に限られる状況で農業生産額が低迷し、過疎化が急速に進行する中、若者が減少し地域の活力が低下するとの危機感があった。そこで、儲かる農業、若者に魅力ある農業を目指し、かんがい農業を導入するために西江上区民が話し合い、水確保の事業の推進等を区民が一丸となって取り組んだ。昭和55年には西部かん水組合を発足し、伊江村でのかんがい農業を先駆けて行った。西江上区の農家所得が増加したことにより、かんがい農業の重要性を村内に浸透させるに至った。
- ② 現在は、担い手が増え、地域の牽引役となってIoTなど新技術導入も図られている。また、若い農業者が中心となり伊江村青年農業交流会、女性経営参画の促進のための農業簿記経営講座などを開催し、経営の向上を目指した担い手育成に取り組んでいる。
- ③ 農業振興が図られたことにより、村内で生産する肉用牛やラム酒、黒糖やピーナツの加工品等、数々の特産品が作られるようになり、6次産業化にもつながっている。

(2) 生活・環境整備面

- ① 耕土流出等の環境への影響を未然に防止するため、地域を挙げて環境保全に取り組む、併せて子供達への農業体験活動も実施している。農業生産の大切さを次代へつなぐ活動の中、地域住民が更に一体となり、農業農村の環境保全、良好なアメニティー形成を進めている。
- ② 西江上区において、平成15年から始まった修学旅行を主とした民泊は、当初は年間3校、300人余りの受入れであったが、現在では、村全体に拡がり、年間300校、4万人の受入れまで拡大した。また、修学旅行生が地域住民と共同で海岸や史跡の清掃活動に取り組むなど、都市と村の交流における農村の魅力を発信している。

・他地域への普及性と今後の発展方向

地域の活性化のために地域住民が一丸となって農業振興を図ることで、安定した農業所得の確保、特産品の開発のほか都市農村交流活動等に取り組んでいる事例であり、今後も取り組みの継続が期待できる。

離島においていち早く農業の高付加価値化に着目し、地域住民が地域の活性化を目指し進取の精神をもって主体的に活動する取り組みは、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。